

「今日の状態で経過すれば、国家の前途に対し、大いに憂うべき結果を生ぜぬとも限らぬのであることを思い、後来、悔ゆるがごとき愚をせぬように望むのである」

(渋沢栄一「論語と算盤」より)



ファンドの運用成績を上げるために、企業に対して無理難題を吹っかけるようなことはしません。そこまで緊張感のある関係をつくるのではなく、かといって、株式持合いのような、なあなあとの関係になるつもりもありません。

企業にとつては、ファンドを購入した良識な生活者からほどよい緊張感を保ちながら、三六〇度視点の情報をキャッチできる。そして、同時にファンドを購入した個人の資金が、よりよい資本主義の創造につながっていく。そういう環境を築いていくことが、コモンス投信の役割であり、目標でもあります。

三〇年投資という 運用コンセプト

「コモンス30ファンド」の「30」には、いくつかの意味が込められています。具体的には、三〇年先

まで繁栄しつづけると思われる三〇の上場会社に投資するというものです。こう言うと、「三〇年も先のことなんてわかるはずがない」という意見も出てきます。確かに、誰も三〇年先の未来を見通せるはずなどありません。とくに、いまのような時代では、おそらく一年先を見通すことさえ至難の技でしょう。

それでもあえて三〇年という意味を込めたのは、「確かに三〇年先のことにはわからないけれども、いまから三〇年後に、自分、自分の子どもや孫、もしくは自分にとって大切な人が幸せに生活できるような社会になっていたら」という願いは、多くの人が、人間としてあたり前のようにもっている感覚だと思ふからです。

その願いを叶えるためには、少しでもよいから、いまからアクションを起こす必要があります。そ

して、その一助として、コモンス投信が存在するのです。

よりよい日本を つくるために

つまり、ファンドに資金を出していただいた個人と、ファンドの投資先である企業とが一緒になって、三〇年後、よりよい日本をつくるためにはどうすればよいのかを考えていく。そのための30です。

また、三〇年という時間軸は、ライフサイクルという点から考えても非常に適切です。生涯を大きく三つの時代に分けたとき、生まれてから三〇年間は、一般的に親の保護のもとで生活し、徐々に社会人として独立していく期間です。

30歳から60歳は、自分で働いてお金を稼ぐ期間。もちろん、働くだけでなく投資もする。そうして、60歳以降の生活に必要な資産

を築いていきます。そして60歳以降は、それまでの貯蓄を自分や次世代のために使う。

このように考えると、いろいろな意味で三〇年という時間軸には意味があります。それが、ファンドのコンセプトになっているのです。

「コモンス30ファンド」は、1月19日から運用を開始し、3月末時点の顧客数は五〇〇人強。うち七割ぐらいが積立てで投資していただいています。純資産残高はまだ小振りですが、厳しい環境のなか、パフォーマンスは好調です。そして何より心強いのは、北海道から沖縄まで、日本全国にこのファンドのコンセプトに対する共感者が増えつつあることです。

* *

次号からは、曾祖父、渋沢栄一の教えを中心に、長期繁栄する企業のあり方を考えていきたいと思っています。